

商業出版に関わるテキストの問題——章回小説を例に

上原 究一(日本学術振興会特別研究員PD)

はじめに

明代後期から清代にかけて隆盛を極めた章回小説は、言うなれば商業出版の申し子のよ
うなジャンルです。明代の嘉靖年間(一五二二～六六) 辺りから商業出版がそれまでより
も格段に盛んになり、書籍の出版点数が大幅に増大するのですが、章回小説はちょうどそ
の頃に刊行され始めています。万暦年間(一五七三～一六二〇)の前期には、出版業が盛
んだった南京と福建とで、それぞれの地の大手の書肆が幾つもの章回小説を立て続けに刊
行した時期がありました。殆どは新作ではなく、既存の作品に様々な付加価値を加えた上
での翻刻だったようですが、その成功によって売れ筋ジャンルとして定着したのか、それ
以降は新作・翻刻ともに様々な地域で大量に営利出版されるようになり、清代に入っても
その状況は続いて行きます。本日は、このように商業出版との結び付きが強いジャンルで
ある章回小説、特に明末清初の章回小説の出版状況を研究する上で報告者が感じて来たテ
キストをめぐる問題を、幾つかお話しさせていただきます。

商業出版ならではの問題

書肆が章回小説を出版する一番の目的は、やはりお金儲けだったはずですが。そのため
には、新作であればまず売れそうなテキストを作る(作らせる)ということになります。つ
まり、初めから不特定多数の読者に営利目的で販売するためにテキストが制作されるわけ
で、木版印刷の普及以前にはまず考えられなかったことでしょう。章回小説の全てがその
ようにして作られたわけではなく、抄本の形で狭い範囲に流通していたものが書肆の目に
留まって刊行されるというようなこともありました。その場合もキリの良い巻数や回数
にまとめ直すなど、見栄え良く体裁を整える処置が取られることが多かったようです。

また、既に刊行されたことのある作品を翻刻する場合はどうでしょう。一つには、テキ
ストの校訂をしっかりとったり、独自の挿し絵を付けたり、名士の評釈(と称するもの)
を加えたり、或いはテキスト本体に新たなエピソードを増補したりといった、何らかの付
加価値を加えて売り上げを伸ばそうとする方法がありました。逆に、描写をより簡潔にし
たり詩詞や韻文を省略したりすることでテキスト本体を短くして版木代や紙代・墨代など
の節約を図るとか、句点や傍線など細かい部分を削って版木作成の手間を省くとかいった、
出来る限り出版にかかるコストを下げるというやり方も存在しました。

つまり、コストをかけて付加価値を加える方向でも、コスト削減を図って簡略化する方
向でも、章回小説は版を重ねる度にテキスト本体が商業的な思惑によって改変される可
能性を多分に孕んでいたのです。「作者」の手になる正統なテキストを伝えようとの意思は、
そこにはまるで見受けられません。

また、写字工(版下書き)や刻工(彫り師)がテキストの改変に一役買うこともありま
した。例えば、版下作成の段階での誤字・脱字や脱文・錯簡、或いは版木制作の段階での
誤刻や錯丁は、覆刻や翻刻の際には常に起こり得ます。また、画数の多い文字を、より画
数の少ない俗字や通用字に変えて手間を省くというようなことも発生します。もちろんこ

れは章回小説のような営利出版物（坊刻本）に限らず、木版印刷一般に存在する問題ではありますが、お上の威信に関わる官刻本や、コストを惜しまず豪華本を作ろうとすることもある家刻本よりも、坊刻本でより生じやすい現象だとは言えるでしょう。

底本の選定基準

では、そのような性格を持つ章回小説を研究するに当たり、どのように底本を選定すれば良いのでしょうか。いかなる場合にも常に底本とすべき絶対的なテキストがあるというわけには行かず、研究の目的によって選ぶべき底本は変わって来ることになります。

例えば、「作者」と呼ぶべきか「編者」と呼ぶべきかは微妙ですが、とにかく作品を集大成した人物の創作（編集）意図を探ろうとするならば、なるべく商業的意図での改変が加わっていないテキストを用いるべきでしょう。この場合、必ずしも現存最古の版本を用いれば良いというものでもありません。例えば、『水滸伝』の場合、完全な形で残る最古の版本である志伝評林本のテキストは簡略化されたものですので、それより刊行が十六年ほど遅れる容与堂本が重視されています。また、『三国演義』の場合、現存最古とされ嘉靖元年の刊行だと見られている嘉靖壬午本よりも、嘉靖二十七年序刊の葉逢春本のテキストの方が古い要素をより多く留めているらしいことが、一九八〇年代末からの版本研究の大幅な進展によって分かって参りました。かといって、葉逢春本のテキストがどの箇所においても常に最も「原作」に近いというわけでもなく、嘉靖壬午本や、或いはより刊行が遅い版本の方が、葉逢春本よりも古い要素を留めていると思われる箇所も存在しますので、一筋縄では行きません。しかも、葉逢春本は一本しか現存が確認されておらず、その一本には欠巻があるのです。このような場合には、複数の版本を参照しつつ、各版本の性格や版本系統上の位置付けを踏まえた上で適宜判断していくよりないでしょう。

或いは、章回小説Aが別の書物Bに与えた影響を探ろうとするならば、書物Bの「作者」なり「編者」なりが依拠したものに最も近そうな章回小説Aのテキストを探し出して用いるのが理想となります。また、ある作品の受容史や、当時の出版文化全体の中での章回小説というジャンルの位置付けなどを把握しようとする際には、個々の版本それぞれが独自の意味を持つことになるでしょうから、なるべく多くの版本に目を配るべきだということになります。

電子テキストと版本研究

結局のところ、個々の章回小説について、まず現存諸本の相対的な関係を整理した上で、それぞれのテキストを綿密に比較検討し、版本ごとの性格を把握するという作業が必要になって参ります。そうは言っても、章回小説は長篇揃いですので、全文の比較は容易な作業ではありません。そこで近年脚光を浴びているのが、まず比較したい版本を電子テキスト化した上で、専用のソフトを用いて異なる版本間のテキストを比較するという手法です。このソフトの出現によって、版本間のテキストの比較研究の利便性は飛躍的に高まりました。開発者である首都師範大学の周文業教授の主宰する「中国古代小说、戏曲文献暨数字化国际研讨会」が毎年開催されており、今年の夏で十二回目を迎えています。

しかし、電子化されたテキストの精度や、表示出来ない異体字の処理方法などの課題もありますし、仮にそれらを解決したところで、版式や字様などどうしても捨象されてしま

う情報もありますから、ソフトを用いた比較が万能だというわけではありません。

そもそも、電子テキスト化する版本の選定は当然のことながら人間の見識にかかっていますから、やはりまずは世界各地に散らばる版本を見てまわって比較検討を行わないことには、まるで話が始まらないのです。

覆刻本・後印本・後修本・通修本

その際に気を付けねばならないこととして、これは章回小説に限った話ではないのですが、木版本は見た目がそっくりだからと言って同じ版木で刷られたものとは限らないし、同じ版木で刷られたからと言って中身が一緒とは限らない、という問題があります。

例えば、一見すると同版（同じ版木で刷られた本）に見えるものが、よくよく見ると異版（異なる版木で刷られた本）だということがあります。一番単純なケースは一方がもう一方の覆刻本だというものですが、両者が直接の親子関係があるわけではなく、共通の祖本から別れた別々の覆刻本だった、などというようなことも間々あります。覆刻本とは言っても、コピーを取ったように同じものが出来るという訳には行きません。確かに、清代の蔵書家が貴重な宋版を覆刻するというような場合には、大金を投じて名工を雇い、底本を一点一画まで忠実に再現しようとすることもありました。しかし、営利出版物としての覆刻本の場合は、誤刻や、俗字への置き換えや、細部の省略などが生じるのが当たり前です。そのため、覆刻を重ねるごとに、テキストはどうしても少しずつ変わって行きます。よって、厳密なテキスト研究のためには、まず同版か異版かの区別を付け、異版の場合にはその先後を判定する必要があります。（なお、意図的な変更や省略がある場合は覆刻本とは呼ぶべきではないとする意見もありますが、そうすると覆刻本と呼べるものはほんの一握りしか残らず、却って実用的な呼称ではなくなってしまうように思います。但し、どこで「覆刻」と「翻刻」との線引きをすべきなのかは、現状よりももう少ししっかりとしたコンセンサスが必要なのではないかと感じてはおります。）

また、版木は長ければ数百年に渡って使われることもありますし、短期間でもたくさん印刷すれば摩耗や破損が進みますから、たとえ同版本であっても、早い時期に刷られた本（早印本）では読める文字が、後から刷られた本（後印本）では読めなくなってしまう、というようなことが起こります。

更に、一揃いの版木のうち、摩耗や損傷がひどくなったものだけを新たに彫り直して取り換えるということもあり、そうして刷られた本を後修本と呼びます。ですから、部分的に比較を行って同版だったからと言って安心するわけには行かず、可能な限り全体の比較を行うのが望ましいということになります。また、版木の一部だけを削って誤字や脱字の修正を行ったり、或いは元々あった文字を消したりというようなこともあって、そのようなものも後修本と呼びます。後修に当たる作業が異なる時期に複数回行われたものは、通修本と呼ばれます。

このような問題があるため、目録情報を見る限りでは同じもののように思える版本同士でテキストにかなりの差があるとか、逆に目録情報による限りでは別の本のようにだが実際には同じ版木で刷られていてテキストは殆ど同じであった、などといったような事態は、全く珍しいものではありません。

影印本やマイクロフィルムの問題点

こうした諸点を見分けて個々の伝本の相対的な位置付けを確定させるためには、調査対象の原本同士を比較出来れば理想的なのですが、所蔵機関が異なればそうは行きません。殆どの場合、別の機関の所蔵本の影印本やマイクロフィルムの紙焼きを持参するなり、パソコンやタブレットにデジタル画像を入れて持って行くなりして比較することになります。

その際に気を付けるべきは、まず影印本には修正が施されていることが少なくないという点です。特に注意を喚起しておきたいのは匡郭です。版の異同や刷りの先後を見分けるには、版木の割れ目や匡郭の欠けている位置が分かり易いメルクマールとなるのですが、影印本では見栄えを良くするために匡郭の欠けをわざわざ塗り潰している例が少なくありません。これに騙されると、版の異同や刷りの先後の判定を誤ることになってしまいます。

次に、白黒の影印本・マイクロフィルム（及びその紙焼き）・白黒画像に共通の問題として、元々文字が印刷されていなかったのか、紙の破損や虫損によってその部分の文字が失われてしまったのかの見分けが付きにくいということが挙げられます。これは原本ないしカラー画像を見れば一目瞭然なのですが、白黒では正確な判定は困難です。

また、たまたま匡郭付近の紙に小さな破損や虫損がある場合、白黒ではそれが匡郭の欠損に見えてしまうことがあるので、これにも注意が必要です。

それから、墨で書き足しがある場合、上手な書き足しになると、白黒はおろか原本を閲覧していてもなかなか気付かないということもあります。

おわりに

結局、原本を閲覧しながら高解像度のカラー画像と比較を行うというのが、現状で望み得る中では最善の方法ということになるでしょう。近年はウェブ上で所蔵版本のカラー画像を無料で公開する機関も増えて来ており、大変ありがたい限りなのですが、一方で所蔵機関によっては原本の閲覧が許可されなかったり、同版とされる二本以上を所蔵している場合に一本しか見せてくれなかったり、撮影や複写が限定的にしか認められていなかったり、認められてはいるけれども非常に高額であったり、閲覧時に電子機器の持ち込みが禁止されていたり、などといったような制約があることも少なくありません。所蔵機関の理解を得るためにも、このような調査の意義を積極的に発信して行くことが必要なのでしょうが、個々人の努力だけでどうにかなるレベルの問題ではないようにも感じます。

一方で、研究者の側も、本の正しい取り扱い方を教わる機会が少なすぎるのではないかと感じております。例えば、線装本は読む際に手で持ち上げてはならず、必ず机なり書見台なりに置いた状態で読むべきであるとか、開いたまま伏せて置いてはならないとかいうようなことは基本中の基本なのですが、残念ながらなかなか守られておりません。あまりに非常識な扱い方をして貴重な資料を傷めてしまうようでは、原本の閲覧が許可されなくなるのは当然のことです。こういった基礎知識の啓蒙をどのような形で進めて行けば良いのか、という辺りも「次世代」の解決すべき課題と言えるのではないのでしょうか。